

## 鉄砲水からの生還

小倉直宗 (アルパインガイドRELA)

今日はいよいよベースキャンプを設営する日だ。度重なるアクシデントによって、ベースキャンプ設営の予定が大幅に遅れていた。はやる気持ちを落ち着かせながら、隊員3名は仮ベースキャンプを昼過ぎに出発した。

歩き始めて間もなく、小さな沢を横切るポイントにさしかかった。朝チェックした時には凍っていたのだが、今は解け始めて水がチョロチョロと流れている。沢状地形の幅は10mほどで、明るく開けている。渡渉地点から下流は、10mほど緩斜面のスラブが続き、その下は枯滝になっている。隊員各々が氷の状態と足場を確認したうえで危険ではないと判断し、渡り始めた。私が先頭で渡り始め、あと3mほどで渡り終わるところまで来た時だった。『あっ。』と最後尾を歩いていたA隊員の声が聞こえた。声は叫ぶような大声ではなく、むしろ小さい声だったが、何か通常ではない声に感じた。直後に頭から猛烈な衝撃を全身に受けた。何が起きたのか全く判らないまま、直ぐ近くに設置されていた塩化ビニール製の送水管にしがみついた。氷の塊と水が猛烈な勢いで頭上から降ってくる。“鉄砲水”だと理解した時には、私は送水管にしがみついた状態で、鯉のぼりの様に氷水になびいていた。氷と水の勢いは収まらず、呼吸をするのも厳しい為、顔を上げる事が出来ず下を向いていた。ふと、水色のウェアが目に入った。私の次に沢を渡っていたB隊員だ。あたかもウォータースライダーを滑るように足を真っすぐに伸ばし、上半身は起きていて、顔は下流を向いた状態で、氷水に乗って流されていく。大声でB隊員の名前を呼

び叫ぶが、全く反応することなく、流されていき私の視界から消えていった。



沢状地形の渡渉箇所と送水管

鉄砲水が収まった後、私は急いで沢状地形を渡り切り、初めて後ろを確認した。最後尾を歩いていたA隊員は辛くも鉄砲水を避ける事が出来たようで、全く濡れていない。私は頭から氷水を浴び続けたために首元から水が入り、ずぶ濡れになってしまった。急速冷凍されたかのように、全身の筋肉がガチガチになっていた。体中のあちこちに痛みがあるものの、骨折等の怪我というほどではない。お互いに動けることを確認し、流されたB隊員を探すため、慎重に斜面を下り始める。再び鉄砲水が襲ってくることを恐れ、沢状地形を渡った地点から下るが、やがて露岩帯に阻まれ断念した。鉄砲水を逃れる事が出来た最後尾のA隊員に対岸から指示を出し、流されたB隊員を探してもらおう。

40mほど下がったところに、一段平らになっている地形が見えた。私の立っている地点からはよく見えないが、おそらくそこで止まっているだろうと推

#### 4. その他

測し、その地点を探すように指示する。十数秒後、『いません！』と大きな声が谷に響いた。まさか、もっと下方まで流されたのだろうか？その地点より50～60m下にもう一箇所、平らになっているところが見えるが、先ほどの場所よりも小さい。そのさらに下方は、険悪なゴルジュが数百m続いている。



送水管（右下の黒いパイプ）と流された下流方面

最悪の事態を想定しなければいけない。極度の緊張と焦りで、思考が空回りしているのが自分でも分かった。『落ち着け！落ち着け！』と声を出して自分自身に言い聞かせる。再び鉄砲水が襲ってくるかもしれないとは考えたが、A隊員と合流して捜索しなければならないと判断し、露岩帯を登り返し沢を渡ることにした。A隊員には、再び慎重に下方を捜索するように指示を出す。露岩帯の登り返しが終わった時、『いました！』と大きな声が聞こえた。『大丈夫か？生きていますか？』と大声で問いかける。『大丈夫です！生きてます！手を振ってます！』にわかに信じられない答えだったが、急いで沢を渡り、斜面を下って合流した。私が合流する前に、小さな滝つぼから3mほど移動させてあり、B隊員は雪の上に横たわっていた。合流すると同時に、B隊員の名前を呼びながら抱きしめて生きていてくれたことに心から感謝した。

直ぐに怪我の状況を確認する。意識レベルは問題

なく、会話も通常に出来る。首、肩、腕と上半身から確認し、左肋骨付近と腰のあたりで異常を訴えた。その後下半身を確認するが、膝、足首は異常は無かった。もしかすると、少し休めば自力歩行が出来るのではないかと淡い期待を抱いたが、左肋骨周辺の痛みが激しいようで、自力歩行による移動は断念する。



発見現場。ツェルトに包まれて横たわるB隊員

現時点で我々の持っている登攀装備を確認し、救助方法を早急に組み立てなければならない。メインロープをはじめとする多くの登攀装備は、前日までにベースキャンプ近くまで荷揚げしてしまっていた。現地点から荷上げた場所までは、どんなに急いでも数時間を要することから、荷揚げした装備を取りに行くという選択肢を消去した。肋骨周辺の激しい痛みが内臓損傷によるものだったら、あまり動かさずにヘリコプターによる吊り上げレスキューが一番安全だと判断し、無線および携帯電話の電波が届く位置まで私が移動してレスキューヘリコプターを手配することにし、A隊員に負傷したB隊員の介助を頼んでその場を後にする。

遭難現場から約40分ほどの登った峠で、下の村で待機しているシェルパに電話がつながった。遭難状況を簡潔に説明し、レスキューヘリコプターの手配を頼む。午前中は晴天だったのだが、昼過ぎから雲が増えはじめて、この時には谷のほとんどが雲で覆

われてしまっていた。ヘリコプターは視界不良時には二次遭難の恐れがあるため、出動してはくれない。最悪、ヘリコプターが出動できない場合には、私とA隊員の2人で仮ベースキャンプまで引き揚げて、テントで暖を取りながら、翌日のレスキューヘリコプターを待つか、人力で下の村まで搬出するしかない。一刻も早く下ろしてやりたいとは思いますが、難しい状況だ。ヒマラヤの山奥では、思うように事が運んでいかない。もしも内臓損傷だった場合は、厳しくなってしまう。気は焦るが、二次遭難を起こさないよう慎重に遭難地点まで戻ること意識を集中した。

遭難現場に戻ると、寝袋とツェルトに包まれた状態で、テントマットを下に敷いたB隊員が横たわっていた。A隊員が仮ベースキャンプから体温の低下を防ぐための処置をしてきていたのだった。

A隊員にレスキューヘリコプターの状況を伝え、仮ベースキャンプまで2人で搬出する旨を伝え、装備の再確認を行い、搬出計画を早急に立てる。

前日までの荷揚げにより、手元に残っていた登攀装備は、8mm径補助ロープ20m、6mm径ロープスリング20m、アルパインクイックドロー6セット、120cmダイニーマスリング2本、アイスハンマー3本、のみだった。この装備だけで早急に搬出計画を立て、実施しなければならない。出来るだけ早く、温かい安全な仮ベースキャンプまで移動させなければならない。

B隊員が横たわっている遭難現場は、緩傾斜の滝の落ち口状地形となっている。氷は張っているものの、支点到耐えられるほどの厚さは無く、さらに気温上昇の為に融けている。側面は傾斜60度ほどのスラブが6~7mほどある。スラブの上は傾斜が緩くなり、傾斜20度~30度の斜面が100mほど仮ベースキャンプまで続いている。スラブは、ハンド&フットホールドが小さく、B隊員を背負って登ることは不可能

である。補助ロープを用いた搬出しか、方法が思い浮かばなかった。

直ぐにロープ担架の作成に取り掛かる。6mm径ロープスリングとアルパインクイックドローで、担架を作ることにする。ロープ径が細いので、身体に食い込むことを防ぐため、テントマットを縦長の二つ折りにして下に敷いた。その上に、寝袋に包んだB隊員を乗せ、ロープスリングで巻いて担架が出来上がった。

次にスラブの上に登り、引き上げの支点構築に取り掛かった。支点となりうる岩を探すのが、周辺には無かった。直径20~30cmほどの小さな岩がゴロゴロと積み重なっているだけだ。地面にアイスハンマーを打ち込もうとするが、すぐに岩盤に当たってしまう。地面の下を確認すると、10cmほどしか表土がなかった。岩盤は表面が激しく風化して脆くなったスラブだ。アイスハンマーのピックを刺せるようなクラックも見つけれない。岩やアイスハンマーによる支点構築を諦め、次の方法を模索する。イソツジに似た丈の低い灌木が多数生えていたので、いくつか束ねて支点構築を試みるが、荷重をかけると次々に折れてしまった。灌木による支点構築も諦める。次に、アイスハンマーをゴロゴロした岩の隙間に刺してみるが、これも荷重をかけると岩が動き始めてしまい、支点にはならない。私自身がアンカーとなって、1/3システムを構築することも試みるが、足場が不安定で、とても耐える事が出来ないと判断した。残る方法は一つだけに絞られた。1/1による引き上げ方法だ。

1/1による引き上げを試みる。ビレーディバイスをセカンドをビレーする状態にしてロープをセットし、引き上げると同時にロープを手繰っていく方法だ。A隊員には、負傷したB隊員の身体が安定するように介助してもらうように指示して、行ってみた。



#### 4. その他

補助ロープの径が細いので、ロープを掴んで引き上げる事は出来ず、スクワットの要領で引き上げる方法をとった。が、補助ロープの摩擦と私より重いB隊員の体重で、思っていたような成果が上がらず、失敗した。

そこで、A隊員に補助を頼んだ。足場が不安定なスラブに立ち、私がロープを引くタイミングに合わせ、負傷したB隊員を下から押し上げるという方法だ。私がロープを引く方法もスクワットではなく、ハーネスにロープを固定して四つ這いになり、“四輪駆動”で引くことにした。前日までの荷上げ装備にクランポンも入っていたため、時々足が滑ることがあったものの、少しずつ確実にB隊員の身体が引き上げられていく。

搬出作業開始からどのくらいの時間がたったのか、時計を確認していなかったのではわからないが、おそらく30分は経っていたと思う。たった6～7mのスラブを通過するのに、ほとんどの体力を消費したように感じた。標高4,200mを越えた高所という影響も少なからずあったとは思いますが、引き揚げの支点構築が出来なかったということにより、精神的にかなり追い詰められていたのだと思う。

夕方になり気温が下がってくるなか、何とか明るいうちに仮ベースキャンプに搬入することに成功した。テント内で灯油ストーブの点火準備をしている頃、下の村から5名のシェルパがビスケット等の食料を持って到着した。私とシェルパ1名でB隊員の身体を温めるため、服を着替えさせたり灯油ストーブに点火作業を行った。A隊員は、他のシェルパ達に遭難状況やB隊員の容態を説明すると同時に、別のテントからB隊員の着替えや装備を取りに動いてくれていた。

シェルパから、レスキューヘリコプターが一度フライトしたと、ヘリコプターの会社から連絡が入っ

たと聞かされた。B隊員の搬出作業中、私たちは一度もヘリコプターの音は聞こえていなかった。シェルパ達は下の村から上がってくる際、今日中にB隊員を下の村まで担いで下ろそうと話し合っていたとのことだが、担がれる姿勢に痛みで耐えられないというB隊員の状況から、断念。翌朝、レスキューヘリコプターによる搬出か、下の村から担架を運び上げ、B隊員を担架に乗せて運び下す、という二つの選択肢に絞られた。シェルパ達は、寝袋等の宿泊装備を持って来ていなかったため、ヘッドランプを点け再び村へ下山して行った。

B隊員の症状は相変わらずだが、温かいテントの中で安堵したのか、少しずつ会話が増えていった。食料も前日までに荷揚げしていたため、今朝の食事で全て無くなっていたが、先ほどシェルパ達が持ってきてくれたビスケットで空腹を紛らわす。B隊員も、自分の行動食を食べたり温かい飲み物を食し始めた。心配していた内臓損傷では無かったようで、ひとまず安心した。長い夜になることが予想されたので、A隊員と代わる代わる仮眠することにして、灯油ストーブを焚き続けることにした。



仮ベースキャンプと送水管 50mほど進んだ地点で鉄砲水に遭った

両隊員とも寝た後、私は今回の事故を振り返り、鉄砲水を回避する方法が無かったか、自問自答し始めた。

(1) 荷揚げに選んだ荷物の順番は正しかったのか？  
登攀装備を残しておくべきだったのでは？予備燃料だけでなく、予備食料も仮ベースキャンプに置いておくべきだったのでは？

(2) 雪崩&落水のチェックだけではなく、薄氷が融けた水が溜まり鉄砲水が起きる可能性があることを想定していただろうか？

(3) 先週までの異常降雪により、ポーターがベースキャンプまでの荷揚げを拒否する状況では、もっと装備&食料等を削って軽量化を図り、スピードアップするべきだったのではないか？

正しい答えがあるのかないのか、それすらも判らなくなっている自分に気が付く。全ては結果論だ。思考の堂々巡りを何度も繰り返すうちに、外が明るくなってきた。

日の出とともにB隊員の装備をパッキングし、レスキューヘリコプターが来るのを待った。天気は快晴無風。この状況だったら、間違いなくヘリコプターは飛来するはずだ。ほどなくして、ヘリコプターのタービン音が聞こえてきた。爆音と爆風がテントを襲う。ヘリコプターは僅かな平地にランディング・スキッド（ヘリコプターの脚）を十cmほど接地させ、絶妙なバランスでホバリング態勢に入った。中からレスキュー隊員2名が担架を持って下りてきて、テントからB隊員を運び出す準備を開始した。B隊員を担架に固定した後、レスキュー隊員1名がヘリコプターに乗り込み、私ともう一人のレスキュー隊員で担架をヘリコプターに乗せる作業に取り掛かる。A隊員は、B隊員の装備をパッキングしたルックザックをヘリコプターに運ぶ。ヘリコプターのプロペラは、今にも斜面に当たりそうな距離で回っている。おそらく50cmほどしか離れていない。爆音と爆風の中、さらにはヘリコプターが墜落するのではないかという恐怖の中、B隊員と荷物の収容作業を終え、パ

イロットの合図と共に、ヘリコプターは再び宙に浮かび、斜面すれすれで旋回し、降りて行った。レスキューヘリコプターは、下の村で待機していたシェルパを乗せ、カトマンドゥに向かった。

我々の登山は失敗に終わった。下山後、カトマンドゥの病院にB隊員の見舞いに行った時、怪我の状況を教えてもらった。肋骨や内臓に異常は無かったが、腰椎に亀裂骨折があったとのことだった。3週間ほど安静し、飛行機に乗る事が出来る状態になると退院の許可が出るらしい。台湾から母親も駆けつけてくれた。病室は個室で広く、母親も一緒に寝ることが許されるという。食事は、見舞いの人も母親の分も無料というサービスの行き届いた外国人向けの病院は、B隊員も満足しているようだった。インターネットも完備されている。退屈しないで済む、と笑っていた。

事故から九か月が過ぎた今、B隊員は日常生活はもちろん、日帰りハイキングや軽いクライミングが出来るまで回復してきている。重たい荷物を背負ったりハードなクライミングを行うと、まだ痛みが出たり疲れが溜まるとの事だが、歩行障害等の後遺症に悩まされることなく、ずいぶんと良くなってきている。

登山は失敗したが、最悪の事態を避けられたことに感謝するとともに、今回の事故は私の救助練習に対する考え方にも変化をもたらしてくれた。支点がない状態での引き上げ、という今まで想定していなかった状況で、今回の搬出作業は適切だったのか、今でも考えさせられる。

今回の我々の失敗経験が、他の登山者の為にプラスに生かして頂けたら、と今回発表することを承諾した。事故は突然襲ってくる。装備や環境が十分でない時、どのように対応できるのかを救助訓練の際に意識するだけでも、意義あることだと考える。

山名、隊員名を明らかに出来なかったのは、諸般の事情によることを御理解頂きたい。